

第10表 台風の強さと被害の程度

	台風番号	台風の強さ	佐 賀		家 屋 の 被 害			田畑の冠水、流失	県関係の被害額
			最大風速	降 水 量	倒 壊	床上浸水	床下浸水		
東側通過	51・15 (ルース)	A	m/s 18.0	mm 148	戸 915	戸 190	戸 880	ha 1,270	万円 ×
	54・15 (洞爺丸)	B	16.5	303	28	290	5,780	3,750	×
	53・02	C	9.4	86	18	320	900	1,278	20,430
西側通過	56・12	*A	24.1	52	30	820	3,270	2,010	386,700
	56・09	*B	27.0	100	175	340	1,060	1,940	278,200
	57・05	C	9.4	96	—	10	70	1,000	1,200

*：有明海沿岸高潮有り

賀から 300km 以内にはいった時の中心示度を、台風の強さと仮定して、950 mb 以下をA、980mb 以下を B、980mb以上をCとすれば、災害を生じた台風13個のうち Aは4個(東側2、西側2)、Bは7個(5・2)、Cは2個(1・1)であった。各クラスの代表的な台風による家屋、田畑の被害は第10表のとおりで、ひとたびAクラスやBクラスの台風に見舞われると、佐賀のどちら側を通過するにしても、数千戸の家屋浸水、数千 ha の田畑の冠水などをはじめとする大きな災害を引き起こすわけである。

6. 結 語

佐賀県の気象災害の資料としては前記災異誌があるほか、すでに福岡管区気象台要報第15号に全般的な解説があり、また『佐賀県の気象』にも詳しい解説が掲載されるはずである。このほか1958年⁽⁵⁾および1960年の夏季干ばつ⁽⁶⁾についてもそれぞれの調査がある。

なお台風については当台技術課の手で、風、雨、高潮

などあらゆる面にわたって詳細な調査が進められているので、この調査が終れば、災害予防の手がかりもより一層明らかになるものと期待される。

資料の収集に当っては北村技術補佐員の援助を受けたことを付記して、ここに謝意を表する。

参 考 文 献

- (1) 佐賀県の気象災害(1958) 福岡管区気象台要報第15号第4章 83~84
- (2) 岡千束(1961) 降水量の積算効果と水害 第2回筑後川洪水予報研究会発表論文集 3-1~3-16
- (3) 大後美保 旱害の研究 127
- (4) 大谷・高橋 天気予報論 368
- (5) 西日本の干ばつ(1959) 福岡管区気象台要報 第16号第6章 121~137
- (6) 渡辺・島本(1960) 1960年夏季干ばつによる佐賀県の被害調査、技術通信 6 195~206

口 絵 写 真 説 明 (台風第7号の前方(350 km)に現われた雲)

19時11分すでに上層雲や中層雲に夕焼けがはじまっており、この夕焼けの色調はオレンジとピンクのミックスしたもので美観を呈した。

一般に台風の襲来時には黒味を帯びた不快な色にはなるが、当日はそのような色彩は全然なかった。

そして、さながら淡いオレンジ色のどん帳が垂れ下った様に上層雲(cs)が中層にかけて広い幕のように下り雄大な感じを受けた。

写真のA雲は付図のA弧線に、B雲は付図のB弧線に夫々分布していた。距離は目測高度から計算してある。夕焼けの終りはA雲(高度6キロ)は19時11分にB雲(15キロ)は19時33分に終わった。日没19時10分。二つの雲の発生は、多度津から南東方約350キロの海上に台風の中心があるころであった。矢印は台風位置を示す。

初めの考察は前面に現われるスパイラル線の外側に對

応する異常雲と推定していたが、その後の調査では四国の陸上に降雨が少なかったので、この頃は四国南東部にレインバンドが現われていなかった。

スパイラル線に対応するものでないならば、上層、中層にできた不連続面に発生したものであろう。この不連続層は大体NE—SWに伸びており、進路の転向予想に役立つものらしく、その界面の前兆雲と解せられた。

四国に上陸する場合には一般法則として気圧が下降しNW—SE 走向の気圧の谷が形成されるため、このNE—SW 走向の異常雲は現われなければならないはずである。

台風は27日3時すぎから徐々にNNEへ転向しはじめ四国へ上陸しなかった。

筆者の経験によると、雷雲の進行前方に、このようなアーチ雲が現われると、雷は来なかったことを記憶している。雷雲の場合は下層雲に現われる。